

シンポジウム4

今、あらためて妊婦健診を考える！—妊婦健診と助産師外来—

真田産婦人科麻酔科クリニック 副院長
平川 俊夫

当院は、地域の住民が妊娠・出産・育児を安心かつ快適に行えることをめざしており、そのために産婦人科専門職の立場から、安全な妊娠・出産管理を行い、母乳哺育の推進、妊産婦の精神的支援を行っている。

当院の妊娠管理は正常例では医師による定期的な妊婦健康診査（妊婦健診）が主体であり、母体の健康状態と胎児発育についての医学的な評価を行っている。またこれに加えて、自由参加形式として医師・助産師・栄養士による母親教室での指導がある。産後の母体管理は医師と助産師が共同で行っており、母乳哺育指導、妊産婦の精神的支援については助産師が主体となっている。

ただし従来は妊婦が助産師と個別に接するのは陣痛が発来し入院してからであり、産前に個別指導を受ける機会は限られていた。

そこで、助産師が主体となって産前の妊産婦指導を行う場を設けることで、妊娠から分娩・育児への切れ目のない支援を提供できると考えた。

平成21年4月より妊婦健診への公費助成が14回に拡充されたことを機会に、助産師による産前妊産婦指導の場を妊婦健診に求めることとし、同4月下旬より妊婦健診14回のうちの4回を助産師による妊婦健診（助産師妊婦健診）として開始した。

助産師妊婦健診の対象者は、医師から妊娠経過が正常と診断され、受診を希望した妊婦である。助産師妊婦健診が行う業務は、正常妊娠の管理、分娩指導、母乳哺育指導、妊産婦の精神的支援である。対象時期は、妊娠20週、30週、37週、39週としている。「素朴な疑問に答えてくれた」、「お産を身近に感じるようになった」、「お産への不安が解消された」など、受診した妊婦の満足度は極めて高い。

産前から妊婦が助産師と接する機会を増やすことにより、妊産婦の抱く出産・育児に対する不安の軽減、疑問の解消が得られ、また助産師の専門性を生かしたより内容の充実した指導を受けることができるので、妊産婦が妊娠・出産・育児をより安心かつ快適に行うことができると期待される。

今、あらためて妊婦健診を考える —妊婦健診と助産師外来—

真田産婦人科麻酔科クリニック
副院長 平川俊夫

はじめに

- 当院における妊産婦支援の現状
- 助産師による妊婦健診
- 妊娠・子育て支援サービスにおける助産師の役割とその問題点

当院の規模

- 病床数19床の有床診療所
- 助産師9名、看護師・准看護師14名、産科医2名、非常勤小児科医1名
- 低リスク妊娠・分娩
- 分娩数756例(平成20年)、うち帝王切開分娩77例(10%)

当院の妊産婦支援

- 妊婦健診(医師)
- エコー検査(技師)
- 母親教室
- 産褥の管理
- 母乳哺育支援
- 精神的支援
- マタニティピクス・スイミング など

母乳哺育支援

- 産前乳房ケア指導
- 2週間健診
- 1カ月健診
- おっぱい外来
- おっぱいホットライン

精神的支援

- 妊娠7か月チェックリスト(SOC)
- 産後5日目チェックリスト(MB, EPDS)
- 2週間健診(退院時EPDS高得点者の再検)
- 電話訪問
- 1カ月健診時チェックリスト(EPDS)
- 保健所との連携
- ベビーマッサージ

助産師妊婦健診の導入

- 妊娠から分娩・子育てへの切れ目のない支援
- 妊婦健診への公費助成の拡充
- 常勤医師の減少
- 対象者: 正常経過、希望者
- 対象時期: 20週、30週、37週、39週
- 予約制
- エコーは技師が担当
- 1名30分
- チェック項目、引き継ぎ記録

助産師妊婦健診後のアンケート結果 (47名)

- | | |
|-------------|----------|
| ■ 充分満足した | 74%(35名) |
| ■ まあ満足した | 26%(12名) |
| ■ 少し物足りなかった | 0% |
| ■ あまり良くなかった | 0% |
- 「素朴な疑問に答えてくれた」、「お産を身近に感じるようになった」、「お産への不安が解消された」

妊娠・子育て支援の分類

- ハイリスク群の抽出
- 快適で質の高い妊娠・子育てへの支援

妊娠・子育てハイリスク群

- 妊娠ハイリスク群
 - 母体ハイリスク群
 - 胎児ハイリスク群
- 子育てハイリスク群
 - 母体ハイリスク群
 - ・ 母乳哺育トラブル
 - ・ 産褥精神障害
 - 新生児ハイリスク群
 - ・ 体重増加不良
 - ・ 虐待

快適で質の高い妊娠・子育てへの支援

- 妊娠・分娩・子育ての情報提供
 - ホームページ・パンフレット・講演会
 - 母親学級・栄養指導・助産師妊婦健診（個別相談）
- 健康増進の機会の提供
 - 身体的健康の増進
 - マタニティエクササイズ
 - 精神的健康の増進
 - 気軽に相談でき、不安の解消される場
 - 仲間づくり：育児の悩みを共有する場
 - ベビーマッサージ・育児サークル
- 育児負担の軽減
 - 金銭的、時間的、マンパワーの援助
 - 託児所、ベビーシッターサービス

助産師の果たす役割の大きい分野

- 子育てにおける母児ハイリスク群の抽出
- 支援情報の個別的な提供
- 妊産婦の精神的な健康の増進

助産師不足の現状

- 助産師が不足しているために、その役割を充分果たせていない
- 特に産科診療所で不足
- 「助産師が適正に就業できるには、分娩数にかかわらず1施設に6-8人は必要」
- 助産師数が6人以上の施設は、病院の77%、診療所の14%
- 産科診療所の61%では助産師数は0-2人

助産師を有効に活用するための条件

- 就労環境の充実
- 医療安全の確保
- 教育の機会の確保
- これらの条件を確保するには施設内の助産師数にゆとりが必要

助産師不足解決の方策は？

- 助産師数の大幅な増加は見込めない・・・
- 助産師の拠点化
- オープンシステム・セミオープンシステムの導入
 - 拠点病院の助産師と診療所・助産所の助産師の連携
 - 人的・物的資源の共有

オープンシステムとセミオープンシステムの比較

- オープンシステム
 - 院外助産師が拠点病院に向向いて分娩等を取りおこなう方式
 - 出張助産師に有用
- セミオープンシステム
 - 院外助産師は勤務施設に留まり、患者のみを拠点病院との間でやりとりする方式
 - 診療所・助産所所属の助産師に有用
- 交流、共有できる診療情報様式、費用の裏付け

まとめ

1. 助産師が妊婦健診を行うことにより妊産婦の満足度は高まる
2. 妊娠・子育て支援において、助産師は(1)子育てにおける母児ハイリスク群の抽出、(2)情報の個別的な提供、(3)妊産婦の精神的な健康の増進、の分野で果たす役割が大きい
3. 助産師は不足しており、とくに診療所での不足が著しい
4. 助産師不足の解決には、助産師の拠点化とオープンシステム・セミオープンシステムの導入が考慮される